OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代化の運命 : A Connecticut Yankee in King Arthur's Court 試論
Author(s)	矢野, 正昭
Citation	Osaka Literary Review. 1992, 31, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代化の運命

— *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* 試論 —

矢野正昭

南北戦争後のアメリカ合衆国は、いわゆる「金メッキ時代」を迎えた。この時代には資本主義が急速な発達をとげたが、それを背景に金銭第一主義の風潮が広まり、経済的成功を第一目標として追求するアメリカン・ドリームが支配的となった。また政治の腐敗も進行した。[1)]

Mark Twain の代表的作品 *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) はその「金メッキ時代」に書かれた。しかし、この作品の舞台は南北戦争前のミシシッピー流域におかれている。ここで Mark Twainは、アメリカン・ドリームを体現するTom Sawyer を冷酷で醜悪な人物として描き出すとともに、それと対照的なイノセントな少年 Huckleberry Finn を主人公・語り手として設定した。すなわち、過去の前資本主義的アメリカを、現在との対比において回顧し理想化しようとしたのである。しかし、この試みは成功しなかった。小説 *Adventures of Huckleberry Finn* の中で、Huck やそれをとりまく要素も金銭の論理に深く支配されていることが明らかになってしまうのである。過去への道は閉ざされていたのであった。

一方、「金メッキ時代」には西部開拓が急速に進み、1890年にはフロンティアの消滅が宣言された。フロンティアは、アメリカの堕落を防ぎ、すべてのアメリカ人に成功の機会を保証するものと考えられていた。アメリカのイノセンスとアメリカン・ドリームの両方の物質的な支えが消滅したことは、アメリカの理念に危機をもたらした。

しかし、19世紀は科学技術の世紀でもあった。とりわけ「金メッキ時代」

のアメリカにおいては、大陸横断鉄道の完成(1869)、電話の発明(1876)、シカゴ大火(1871)後の摩天楼の出現など、近代技術の成果を目に見える形で示す出来事があいついだ。多くのアメリカ人は、近代技術のめざましい進歩と産業文明の発展をまのあたりにし、その延長線上に明るい未来を予想することができたのである。Mark Twain もまた、このような進歩主義を強く支持していた。[2)]

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court は、小説としては *Adventures of Huckleberry Finn* に次いで、1889年に発表された。この物語は、19世紀後半のアメリカの一技術者が6世紀のイギリスにタイム・スリップし、中世イギリス社会の近代化を試みるというものである。この構想は、上述のような進歩主義の考えにそって作られたものと考えられる。すなわち、中世と近代を対比させて後者の優位を明らかにするとともに、[3)] 歴史の進歩を加速する近代技術の力を示すことによって、アメリカ産業文明の希望にみちた未来を展望しようとしたのである。前作で過去の理想化を試みた Mark Twain は、今度は現在と未来に理想を求めたのだ。

この小説の主人公 Hank Morgan は、アメリカ合衆国コネティカット州ハートフォード生まれの "a Yankee of the Yankees" である。彼は自分のことを感傷とはまったく無縁の人間だと言い、続けて自分の経歴を紹介する。彼は鍛冶屋の子として生まれ、最初自分も鍛冶屋になるが、まもなく兵器工場に職を得て、そこで技術を身につける。そして小銃、拳銃、大砲、ボイラー、エンジンといった "all sorts of labor-saving machinery" を作ることができるようになる。彼はまた、どんなものでも、それを作る適当な方法がない場合には、新しい製造法をたやすく開発する能力をもっている。つまり彼は、理性的・科学的な精神をもち、かつ極めて高い技術的能力を身につけた技術者なのである。

またここで明らかなように、Hank は典型的な self-made man である。そのうえ彼は、次の言葉に示されるように、現実的な判断力と不屈の精神をあわせもっている。"One thing at a time, is my motto—and just play

that thing for all it is worth, even if it's only two pair and a jack." (*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* 17) つまり Hank はアメリカ人のひとつの理想的なあり方を体現しているのである。

それでは、Hank の思想・信条はどのようなものであろうか。まず政治的には、彼はアメリカ的な共和主義を支持している。彼によれば、国民の能力は無名で貧しい多数の人々のうちにあるのであり、国民が自らを統治することが不可能であったためしはない。従って、最上の君主制といえども人民主権には及ばないのだ、という。また彼は別の場所で、国家にとっての制度を人間にとっての衣服にたとえ、コネティカット州憲法を引用した上で、"Under that gospel, the citizen who thinks he sees that the commonwealth's political clothes are worn out, and yet holds his peace and does not agitate for a new suit, is disloyal ; he is a traitor." (67) と主張する。これは圧政にたいしては革命こそ市民の権利であり義務であるとうたった合衆国独立宣言の精神を受け継ぐものである。Hank は明らかにアメリカ共和主義の子なのである。

また彼は、宗教的には、リベラルなプロテスタントを信奉している。彼自身は長老教会派に属しており、誰でも宗教を持つべきだと考えている。ただし彼の考える宗教のあり方は、19世紀の合衆国のそれをモデルとしたものであって、1つの宗教を40の自由な宗派に分割し、それらがお互いに牽制しあうようにすればよいとしている。彼のこのような考え方の背後には、国教会(6世紀のイギリスではローマン・カトリック教会) に対する強い反感がある。彼は "Concentration of power in a political machine is bad ; and an Established Church is only a political machine ; ... it is an enemy to human liberty, and does no good which it could not better do in a split-up and scattered condition." (89-90) と主張している。

共和主義とプロテスタンティズムが、アメリカ資本主義の精神的な支えであったことを想起すれば、このような思想・信条をもつ Hank は、中世イギリス社会にあって資本主義的な近代化を行なうのにふさわしい人物として

設定されているといえるだろう。

さて Hank は、1879年のある日、主任監督として働いている兵器工場で工員とのけんかに巻き込まれ、バールで頭を殴られて意識を失う。意識が戻った時、彼は528 年のイギリスにタイム・スリップしていたのである。

ここ6世紀のイギリスは Arthur 王の治世であるが、王と円卓の騎士たちが強い権力をもつ一方、国民のほとんどは、文字通りの奴隷か事実上の奴隷かのいずれかであるに過ぎない。そのような体制を精神的に支えているのが、ローマン・カトリック教会である。教会はキリスト教の教えをゆがめ、国民に支配階級への服従を強いている。さらに、魔術師の Merlin も、迷信深い国民の間に強い影響力をもっている。一言でいえば、この社会は中世の暗黒のただ中にあるのだ。

ここで、Hank はたちまちひとりの騎士から戦いを挑まれて捕虜にされ、牢獄で処刑を待つ身となる。しかし彼は直ちに持ち前の科学知識によって日食を予測したうえ、魔術の力で太陽を滅ぼしたかのように人々に信じさせ、Merlin を上回る大魔術師としての名声をかちえる。そしてさらに、黒色火薬を使って Merlin の塔を爆破し、Merlin の権威を失墜させる。彼は民衆から "The Boss" という称号を奉られ、王に次ぐ絶大な権力を手にする。"I was no shadow of a king ; I was the substance ; the king himself was the shadow." (40) という言葉は、彼の自信のほどを示している。

ここで注目されるのは、権力を掌握する過程において、Hank が、技術者というよりも産業資本家のように振舞い始めるということである。[4] 彼は自分の行動を常にビジネスになぞらえて表現する。例えば、彼は日食の「魔術」をおこなう前、もしこれが成功すれば "in a business way it would be the making of me." (31) と予想する。とりわけこの傾向は、同業の魔術師に対する態度に顕著に現れる。Hank は Merlin と対決して勝つたびに "Merlin's stock was flat." (39) "His stock was flat again." (227) などと株式市場の比喩を用いる。また別の魔術師との腕比べに勝った時には、"Yes, a man can keep his trade-mark current in such a country, but he

can't sit around and do it ; he has got to be on deck and attending to business, right along." (135) と言っている。同一の市場において同業者との競争に勝ち抜こうとする精神は、まさに産業資本家のそれである。

権力を握った Hank は、直ちに中世イギリス社会の近代化に取りかかる。その近代化は、ほとんど資本主義化と同義である。彼の為政者としての初仕事が特許局の発足であったことは象徴的である。そして次に着手するのは教育改革と宗教改革である。彼は教員工場と多数の日曜学校を作るが、その結果、学年制学校の制度が成立し、またプロテスタントのさまざまな宗派が成長し始める。資本主義化のためには人的資源の動員が不可欠であるが、その準備が整ったということである。またこれと並行して、近代的工場群の建設と熟練工の養成も開始される。こうして4年がたつ頃には、Hank はいつでも望む時に中世の暗黒を文明の光で満たすことができるという状態になる。

また彼は6世紀の若者 Clarence を "head executive" として、情報・通信産業にも手を広げる。彼らは、新聞発行の準備を進めるとともに、ひそかに電線を敷設して電信・電話のネットワークを建設していく。これらは後の事件においてその威力を発揮することになる。Hank は巡礼の一団とともに "the Valley of Holiness" を訪れるが、その地の聖なる泉は枯れてしまっていた。Hank はさっそく近代技術を駆使して、この泉をよみがえらせるという「奇跡」を演じる。その後まもなく史上最初の新聞 *Weekly Hosannah and Literary Volcano* が創刊され、この事件を報道する。また、別の魔術師がライバルとして現れ、予言の腕を競うことになった時には、Hank は電話を用いて事実をいち早く知り勝利をおさめる。このように Hank が中世イギリス社会の近代化を進めるほど、その成果がさらに彼の力を強化することになるのである。

この中で注目されるのは、Hank が、中世の騎士道に打撃を与えるための武器として商品広告を利用するという事実である。彼は騎士たちに、たとえば "*Persimmon's Soap—All the Prime-Donne Use It.*" (78) などという広告の看板を着けさせて、石鹸のセールスに当たらせる。そして、ある騎士が

販売成績を上げられずに意気消沈しているのを見かけると、その看板を“*Patronized by the Elect.*”（80）と書き換えさせ、セールスの旅を続けるよう激励しさえする。Hank はこうすることによって騎士を“ridiculous”なものとし、中世の騎士道をパロディ化し無力化しようとしているのである。資本主義における商品広告は、あらゆるものをメディアとして利用するとともに、そのものが本来もっている歴史性や価値体系を消し去って、商品の販売を促進するという単一の目的に置き換えてしまう。Hank はここで資本主義に内在するそのような力を利用しているのである。

このほか、Hank が行う制度的な改革としては次のようなものがあげられる。王室関係の税金について、国民の負担を均等にする税制改革。Royal Grant や療癘患者への支出を削減する財政改革。ローマ時代からの古い通貨にかえてアメリカ式の通貨を流通させる通貨改革。保険制度の創立。そして自由貿易の推進。これらはすべて、中世イギリス社会の資本主義化を制度・政策面から支える役割をもっている。

さて、この後 Hank は Arthur 王とともに自由民に身をやつして旅に出るが、その旅から帰ると Sir Sagramour の挑戦に応えて公開試合に臨む。Sir Sagramourの背後には魔術師Merlin がおり、この戦いは事実上、理性のチャンピオンと魔術のチャンピオンとの間の、遍歴騎士制度の存否をかけた戦いとなる。重装備の騎士に対し、Hank は軽装で相手の槍をことごとくかわすばかりか、逆に投げ縄を用いて騎士たちを次々と落馬させる。そして投げ縄が Merlin によって盗み取られると、Hank は今度は拳銃を用いて騎士たちを射殺し勝利をおさめる。この戦いにおけるHank の武器、すなわち投げ縄と拳銃はいずれもアメリカのカウボーイの道具である。また拳銃は、彼が19世紀のアメリカにおいて職業として製造していたものでもある。つまり Hank の勝利は、近代アメリカの中世イギリスに対する勝利でもあったのである。戦いのあと Hank は“The day was mine. Knight-errantry was a doomed institution. The march of civilization was begun.”（227）と確信する。

Hank がここで予想しているように、この後、中世イギリスに理想的な近代社会が建設されていくのであれば、この物語は進歩主義の考えを支持するユートピア小説になったことであろう。それは同時に、アメリカの現状を肯定し、明るい未来を展望することにもつながっていく。[5] ところが物語はこの後急転し、意外な方向に進んでいくことになる。

Hank は、騎士たちとの戦いに勝利したことに自信をえて、これまでひそかに建設してきた学校や鉱工業施設を一気に公然化する。そして3年がたつと、中世イギリスは近代国家の姿に近づいてくる。奴隷制は廃止され、税制も改正される。また、蒸気機関や電気機器も普及し始め、鉄道の運行も開始される。こうして Hank は、いよいよ最終目標であるカトリック教会の廃止と共和制の実施を検討し始めるのだ。Hank は、来るべき共和制の下では男女の差別なく参政権を与えることにしようと計画する。現実のアメリカ合衆国においてさえ、女性参政権の実現は憲法修正第19条の成立(1920)まで待たなければならなかったことを考えれば、Hank の共和制構想がいかに徹底したものであったかがわかる。

しかしちょうどその時、彼と6世紀の女性 Sandy の間にできた子ども Hello-Central が病気になり、その療養のために家族でフランスに渡ることになる。ところが、彼の不在の間に内戦が起こり、イギリス国内の情勢が一変する。この内戦の契機が、株式市場での投機にあったことは注目に値する。投機に失敗して大損を出した Arthur 王の甥たちが、王の関心をそらすため Guenever 王妃と Sir Launcelot の不義を密告し、怒った Arthur 王が Sir Launcelot に戦争を仕掛けるという形で内戦が始まったのである。中世イギリスの資本主義化は、まさにその副産物としての投機によって自壊し始めるのだ。この株式市場は Hank 自身が設けたものであった。Hank はかつて "No sound and legitimate business can be established on a basis of speculation." (98) と語ったことがあるが、その警告は彼自身にはね返ってきたのである。

この内戦はイギリス国内の力関係を激変させる。まず、教会が聖務停止の

ストライキを起こし、民衆の間に根強く残る迷信を利用して再び権力を握る。電気禁止令が出され、近代的諸機関が活動を停止する。そして、生き残った騎士たちの全部が教会側について結集する。Hank が個人的に知っていた騎士たちは、内戦の中で Arthur 王を含めほとんど戦死したので、教会側の騎士たちは名前をもたない不気味な mass である。結局、Hank と Clarence のもとに残ったのは、52人の青年たちだけであった。

孤立した Hank たちは、情勢の挽回をねらって共和制の樹立を宣言するが、教会と迷信の影響下に入った民衆にはもはや通じない。"Yes, it was now 'Death to the Republic!' everywhere—not a dissenting voice. All England was marching against us! Truly this was more than I had bargained for." (247) とHank は嘆く。やむなく彼らはこれまでに築いた文明を自ら爆破し、洞窟にたてこもる。その洞窟は、Clarence があらかじめ機関銃を配備したり高電圧の電気を通した鉄条網を建設したりして、防備を固めてあったのだ。Hank たちはこれらの近代兵器を駆使して、包囲攻撃してきた騎士の軍勢を迎え撃ち全滅させる。"Within ten short minutes after we had opened fire, armed resistance was totally annihilated, the campaign was ended, we fifty-four were masters of England! Twenty-five thousand men lay dead around us." (255) 一見、Hank たちは再び勝利をおさめたように見える。しかしそうではなかった。まもなく彼らもそれを悟ることになる。

戦闘が終わった後、彼らが置かれた状況は、Hank の副官 Clarence の言葉によれば、次のようなものであった。"We were in a trap, you see—a trap of our own making. If we stayed where we were, our dead would kill us ; if we moved out of our defences, we should no longer be invincible. We had conquered ; in turn we were conquered." (256) 彼らは騎士の死体の山に埋もれ、自らも死を待つばかりという皮肉な状況に陥ったのである。この後、Hank は負傷したうえ、Merlin によって13世紀の間眠り続けるよう呪いをかけられる。これまで Hank に侮られるばかりだった魔術

が、ここで初めて実際の力となって Hank に復讐するのだ。19世紀に再び目を覚ました時、彼は過去からも現在からも取り残されたひとりの老人になり果てていたのである。

さて、この最後の戦闘の場面では、近代技術のもつ破壊性がはっきりと暴露されている。Hank は6世紀のイギリスで電信・電話や工場など生産的な施設も確かに建設したが、最後に作ったのは、機関銃や電気鉄条網といった大量殺人兵器にほかならなかった。中世の盲目的で不可解な力による攻撃が Hank たちを追いつめ、こうした近代兵器に頼ることを余儀なくさせたのだ。[6] 冒頭の自己紹介において Hank は、小銃、拳銃、大砲といった兵器類をボイラー、エンジンなどと同列におき、それらを作る自分の能力を誇らしげに述べていた。また彼が6世紀にタイム・スリップした契機も、仲間との暴力沙汰であった。近代技術にひそむこのような破壊性が、中世の力によって引き出されたのである。そのうえ Hank たちは、近代兵器を使ったために、ついには死んだ敵に敗北することになる。彼らの陥った自縄自縛の状況は、客観的に見れば滑稽である。つまりここでは、物語の前半で中世が近代によってパロディ化されたのとは逆に、近代技術の破壊性と限界が中世によって暴露され、ブラック・ユーモアの対象とされるにいたっているのである。

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court は、科学技術による明るい未来を予想する進歩主義の立場から書き始められた。主人公 Hank の政治的・社会的主張には、作者 Mark Twain のそれと共通するところが多数認められる。そして、彼の主導する中世イギリス社会の近代化は、少なくとも前半においては、成功するかにみえる。しかし、 Mark Twain の想像力は、この物語が、そのままの方向で進行し、楽観的なユートピア小説として終わることを許さなかった。彼は、歴史とはそのように進むものではないことを感じとるだけの歴史感覚を持ち合わせていたのだ。すなわち、この作品で Mark Twain の想像力は未来への道もすでに閉ざされていることを鋭く予見したのである。

しかし Mark Twain は、この時代に顕在化したアメリカの理念の危機に

対して、有効な認識と対処を可能にするような構想をもっていなかった。それは、近代化、共和主義、プロテスタンティズム、資本主義の4者を等号で結ぼうとするアメリカ資本主義の枠組みからMark Twainが自由でなかったことを意味する。彼の想像力の限界は、この作品における民衆の描き方に反映されている。Arthur王が彼なりの偉大さや人間的魅力をそなえた人物として描かれているのに対して、この作品に登場する民衆は常に信頼しがたい存在である。例えばMarcoはいったんHankの意見に同調しながら、結局は裏切って支配階級の側についてしまう。それは、教会の命ずるままに"Death to the Republic!"と叫ぶ民衆の姿と重なる。Hankは民衆こそ共和制の基礎と考え、彼らへの信頼を繰り返し表明してきたが、最後には"Imagine such human muck as this ; conceive of this folly!"（247）と叫ぶにいたる。迷信の中に生まれ育った中世イギリスの民衆は、あたかも機械のように迷信に従って行動するばかりなのである。ここには、後に"What Is Man?"（1906）で展開される人間機械論の萌芽が認められる。

*Adventures of Huckleberry Finn*において過去の理想化に失敗したMark Twainは、*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*において現在と未来に希望をつなぐこともできなかった。その結果、彼は深刻なジレンマにとらえられることになる。この作品以降、Mark Twainは*The Tragedy of Pudd'nhead Wilson*（1894）、"The Man That Corrupted Hadleyburg"（1899）、*The Mysterious Stranger*（死後出版）を発表するが、これらを通じて、彼の作風は目に見えて暗くなっていくのである。

*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*は、Mark Twainの他の代表的な作品に比べ、これまで必ずしも高い評価を与えられてこなかった。[7] しかしMark Twainはこの作品において時代の危機と正面から取り組んだのであり、彼の想像力の特質と限界を鮮やかな対比としてそこに読みとることができるのだ。

注

1) Mark Twain は *Autobiography* の第24章で、当時の汚職事件を列挙し、実業界の大物らを“professional grafters”と非難している（121)。
2) Everett Carter は、Mark Twain が共和主義・技術・進歩といったアメリカ的価値を熱心に擁護していた事実を挙げ、“soft” critics を批判している（434-452)。
3) *Autobiography* の第54章で Mark Twain 自身もそのような意図のあったことを示唆している（271)。
4) Henry Nash Smith はこの点について “The imagery employed by the Yankee supports the notion that he is more of a businessman and speculator than a master technician.”（160）と述べ、Hank がビジネスの比喩を頻繁に用いることを指摘している。
5) 同時代の批評家のひとりWilliam Dean Howells はこの作品について “it is ... an object-lesson in democracy. It makes us glad of our republic and our epoch.”（325）と述べており、Hank の最終的な敗北には言及していない。
6) 時間的な距離を空間的な距離に置き換えると、中世のこの不可解さは（アメリカにとっての）外国の不可解さと重なる。Andrew Jay Hoffman は Hank を19世紀後半のアメリカ帝国主義と結びつけている（135-137)。
7) 例えば James M. Cox はこの作品を Melville の *Pierre* とともに “extravagant failures” と評している（198)。

Works Cited

Carter, Everett. “The Meaning of *A Connecticut Yankee.*” *American Literature* 50 (1978) : 418-40. Rpt. in Ensor 434-452.

Clemens, Samuel Langhorne. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court.* Ed. Allison R. Ensor. New York : W.W. Norton & Company, 1982.

Cox, James M. *Mark Twain : The Fate of Humor.* 1966. Princeton : Princeton UP, 1976.

Hoffman, Andrew Jay. *Twain's Heroes, Twain's Worlds.* Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1988.

Howells, William Dean. “His Wonder-Story.” *Harper's Magazine* 80 (1890) : 319-21. Rpt. in Ensor 324-328.

Smith, Henry Nash. *Mark Twain : The Development of a Writer.* 1962. New York : Atheneum, 1974.

Twain, Mark. *The Autobiography of Mark Twain.* Ed. Charles Neider. New York : Harper & Row, 1959.